

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.78 2017年6月18日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

川崎郷土・市民劇 第6弾

「南武線誕生物語」が開催されました

5月13日(土)、14日(日)多摩市民館、19日(金)～21日(日)エポックなかはらで開催された「第6回川崎郷土・市民劇」を観劇、出演された方々に感想を寄せていただきました。

南武線誕生物語—夢見る男たち—を観て

鉄道は地域の方々との共存あってこそ

公家 進

「労働者の街川崎から、基地の街立川を結ぶ35.5キロの南武線」と言われた時代がありました。首都圏ではあまり目立たない地味な黒字線区の印象が定着してきたように思います。私が車掌時代、車内で乗車券を拝見していると、よくお客さまから「南武線は私鉄なの？」と尋ねられました。「はい、その昔は私鉄でしたが今はJRです。」とお答えしたことが幾度もありました。まずは川崎駅南武線ホームの発車ベルの音が鳴り響くと幕が開き、南武線の旅が始まります。

プロローグ南武鉄道電車内…ガイドの好演が光り開幕から拍手が起る。迫真に迫る嵐の多摩川河川敷シーンに続く、八幡神社境内。秋元が「これは一揆ではない。村民の意思をお上に伝える請願なのだ。いいか、このアミガサは仲間の団結の証だ。」国鉄民営化に向けた過程で展開された国と国鉄当局による国労攻撃の中、1センチ四方の国労バッチを胸にした時代が重なる。舞台は一向に鉄道建設が進まない中、川向う



東京側は鉄道輸送による砂利運搬が進む苛立ち。しかし漸く建設資金集めにこぎつけた秋元の家での妻ふじとの会話が秋元の胸中を示してくれる劇中の鍵となる場面であったと思う。ふじは言う。村や橘樹の人々のために捨身となって働く、あなたが眩しいのです。影となり時として日向となって秋元を支え、あなたの夢は私の夢。あなたの、その夢を私に分けてください。あなたと一緒に…。胸元が「キューッ！」となるのを堪えて間もなく、料亭田中屋の場面。いよいよ浅野と安田登場の一席。南武鉄道を産業鉄道としての使命を図る大富豪同士による談義もひと段落し、浅野の「女将、酒と肴、それと踊りだ。」の一声で舞台は一転艶やかな場を醸し出す。金屏風をバックに舞妓さんたちが踊る「梅は咲いたか」の舞いと小唄には男性諸氏のみならず、一瞬にして会場全体を魅了した感があった。あっぱれ！質の高い芸術性と日本文化に拍手。

舞台は休憩を挟んでの第二部、麹町事務所ではそれとは対照的に人民のための人民による会社を創れとの注文が続き、悩み苦しむ秋元。そして最後の最後まで民衆の意を汲んで容易に浅野に財政支援を求めない秋元に観ている側も冷や冷やしながら時計を見てしまうくらいだ。「まだ引っ張るのか…この劇は時間内に終

「南武線誕生物語」の舞台 (写真©小池汪 以下同)





われるのか…」と。そして、「私は教育にお金を賭け、人を創る、新しい価値を生む人づくりをするということを学んできました。」と説く浅野の理念に共鳴したのかここでやっと手を取り合う2人を確認できてホッとしました。その後、秋元に対する罵声が伴う一方の声。インターナショナルのうたごえがよさこい節に変わってしまう展開は芝居ならではの醍醐味なのだろうか…。

昭和5年、幾多の苦難を乗り越え遂に南武鉄道は全線開通を迎えましたが、そこに働く鉄道員の姿が見られず残念でした。当初の台本にあった【特別出演】南武線の方とあったようですが、最終公演の舞台だけでも参画できたら更に90周年記念に花を添えられたのではないかと思います。鉄道は地域の方々との共存あつての乗り物と教えられる思いでした。

(国鉄横浜うたう会)

素敵な思い出になりました

袴田 羽音

今回、川崎郷土・市民劇「南武線誕生物語」に出演させていただきました、袴田羽音です。高校演劇をやめてから、舞台とは縁のなかった私ですが、以前出演していた父親の勧めで参加を決めました。いざオーディションが始まってみると、演技や歌がうまい方ば



かりで非常に緊張しましたが、演出の板倉さんや周囲の方々のおかげで、のびのびとやることができました。

オーディション終了後、「白井房子」役をいただきました。房子は貧しい農家の娘で、その貧しさのあまり姉が身売りをしてしまう、というような役だったのですが、最初のうちは慣れない言葉遣いと、自分の知識のなさゆえの想像力の乏しさに苦しめられました。終演後に知り合いの方から「歴史の勉強になったでしょう」と言われたのですが、まさにその通りで、劇中の舞台である大正・昭和に起きたことや、人々の暮らしを知らなかった私は、はじめ、役として動くことも話すこともできませんでした。何度かシンポジウムに参加させていただいたり、関連する書籍を読んだり、周りの方に教えていただいたりして、役についても考えました。

また、普段ではありえないような貴重な経験も、たくさんさせていただきました。プロの方に自分の演技を見ていただくのも初めてのことでしたし、そもそも七五三以外で着物を着ること自体が初体験で、何も



かもが新鮮でした。そんな私の経験のなさに、ご迷惑をおかけしてしまうことが多々あったのですが、そういうときにも周りの方々が相談に乗ってくださったり、着物の着付けを教えてくださいました。様々な形で支えてくださいました。今は、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

稽古中は、自分の場面がきちんと完成できるか不安で、押しつぶされそうなきもありませんでしたが、最終的に無事に本番を迎えられ、そして何事もなく終わられて、本当に良かったです。

最後になりましたが、私はもともと、川崎演劇まつりや、この川崎郷土・市民劇を観に行っただけをきっかけに舞台に興味を持ちましたので、今回その憧れの舞台に出演できて、本当にうれしかったです。素晴らしいキャスト・スタッフの方々にも恵まれ、この上なく素敵な思い出になりました。本当に、ありがとうございました。(協力出演者)

「表現の自由」を具体的に経験

川口 崇

「表現」は、憲法上、最も重要な人権として位置づけられます。なぜなら、人が、表現をすることを制限されれば、たとえば、政治的な意見を自由に述べることもできず、その意見を受領する（知る）こともできないからです。

私は、表現の自由という権利について机上で学んだものの、肝心の表現方法や表現のあり方については、知らずに生きてきました。

偶然の重なり合いによって、「南武線誕生物語」に出演することになりましたが、無事に千秋楽を迎え、出演者・スタッフ・京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間の皆様と一緒に、1つの芸術作品を作ることができ、とてもよい経験ができたと感じております。



芸術的表現には、唯一の正解が存在しません。演劇では、脚本から解釈される振り幅の中で、役者本人・演出家・他の役者との関係性から、より最適な役作りを選択していきます。演出家と役者との芸術的感性のぶつかり合い。その細やかな協同での試行錯誤の積み重ね。私は、当初、これが稽古の核心であることを理解していませんでした。愚かにも、キャラクターの設定や話し方と立ち居振る舞いは、脚本上で既に決まっているものと勘違いしていたのです。

演劇には、与えられる課題に唯一の正解がない分、演技はより難しく感じました。千秋楽を終えた今も、「職員A」としての自分の演技が、正解の1つ足り得たのか、確信を得られずにいます。この難しさが、演劇の魅力となり、演劇人を舞台から離さないのかもしれない。

ところで、憲法で、表現の自由を与えられていても、表現の機会がなければ、絵に書いた餅です。市民劇は、



演劇素人を舞台上に上がらせるという挑戦的な試みですが、表現の機会を国民（市民）に提供する意味で、重要な意義を有しています。結成宣言の「文化の砦」を正に体現していると感じます。

演劇素人の一市民である私に、貴重な経験をさせていただき、感謝しております。京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間の皆様との集い（屋上での懇親会）は、とても良い思い出です。



最後になりますが、法律問題でお困りになりましたら、お気軽にご相談ください。その際には、ぜひ「南武線仲間の〇〇です！」とお伝えください。

(弁護士川口崇・045-663-6874)

(協力出演者)



「旬をたのしむ夕べ」を思う

和気あいあいとした時間を過ごしました

小野寺 晃

4月15日土曜日の夕方。旬をたのしむ夕べの当日は天気に恵まれ計画通り行われました。

参加者44名の中で市民劇出演者21名の方々が賑やかで、料理に皆さん堪能されていました。時間の関係で屋上はお開きにした後も一階で時間の許す方の二次会にも多数の人が居残り話題が尽きないようでした。盛大に行われ主催者は満足していますが、次回の時はもっと準備の仕方や、料理・配膳・運搬・片付けなど、改善する点があります。

次回も行うようですが、京浜協同劇団と文化の仲間の絆を強くとの思いで始めていると思いますので劇団員の新人さんの参加が欲しいと思います。できれば下準備からお手伝いをお願いしたいと思います。文化の仲間の役員は高齢ですのお手伝いを劇団員の方にもお願いしたほうが良いと思います。



カツオのほかには筍ご飯、ホタルイカなども

下準備も結構大変で、料理の盛り付け1つにしても時間がかかる作業です。ただの飲み会ではなく「旬をたのしむ」会なので、メニュー表を作って、各料理のご紹介もしました。

「旬をたのしむ夕べ」も今回で3回目になりますが、今回の旬のメインは、カツオと筍でした。筍は、横浜市保土ヶ谷区の二村さん（文化の仲間代表）の家の近くになっているので、地主さんに事前をお願いして、2日前の木曜日にとっていただき譲っていただいた新鮮な筍です。



この新鮮な筍をどういう料理にするかも、この会の見せ所ですが、筍焼きも筍ご飯も大好評でした。筍ご飯は大釜が必要なので、西海亭の須田さんに作っていただきました。

カツオは、劇団の細田さんに準備していただき、メインディッシュにふさわしい華やかな料理になりました。

いろいろ工夫をしながら準備しましたが、市民劇出演の皆さんを始め参加者の方々が「おいしい」と言ってくれて、和気あいあいとした時間を過ごしていただいたので、やってよかったと思いました。

（文化の仲間世話人）

室ちゃんをつれづれに思う

若菜 とき子

劇団創立メンバーの中に室野定子、若菜とき子のほか多くの元気な仲間たちが参加した。創立以来、公演の「主役」を張ってた室ちゃん。ことに小田先生の作品では常に主役だった。小田先生の最後の「おふくろ」を演らせてほしいとお願いしたが「ダメ」でした。役者として遜色はないがとの答え、残念無念!!

今から13、4年前、室ちゃんの言動があやしくなってきた。役者も演出も、スタッフとしての腕をふるい器用な彼女が、縫いぐるみの人形の帽子を依頼したが、どうしても作れないと言い出して作業をやめてしまった。今までにないことと不思議に思っていたが、それが病のきざしかな? 言動にも、劇団の運営についても65歳定年制をしくべきとか、観客動員数が30人以下になったら劇団を退団する等々、おだやかでない言動がしきりだった。本当は、私に愚痴っていたのだろう。

このような病は周りが薄々感じながらも、家族・親族からのキッカケがないと、なかなか言えるものではない。あるとき夫の水野さんから相談を受け、セツルメント婦長だった大山さんに訴え、すみやかな処置ができた。

あれから12年間、無私無欲で過ごした室ちゃん!! ご苦労様。私はまだまだ我欲に取りつかれて過ごしていくであろう。 やすらかに

（元劇団員で創立メンバー、元運営委員の室野定子〔本名・水野定子〕さんは長期療養中のところ、5月24日、亡くなられました。81歳でした。）



2001年の舞台から

